



38

世界文学全集

裸者と死者 く1>

メイラー／山西英一訳

世界文学全集 38

裸者と死者 I

ノーマン・メイラー

訳者 山西英一

Copyright in U. S. A. by N. Mailer. This book is published in Japan
by arrangement with S. Meredith through C. E. Tuttle Co., Tokyo.

発行／1971年 6 月30日 7 刷／1977年 8 月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／二光印刷株式会社 製本所／大口製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／中田製函株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

第一部 波

第二部 陶土と型

ノーマン・メイラー

.....
447

.....
56

.....
9

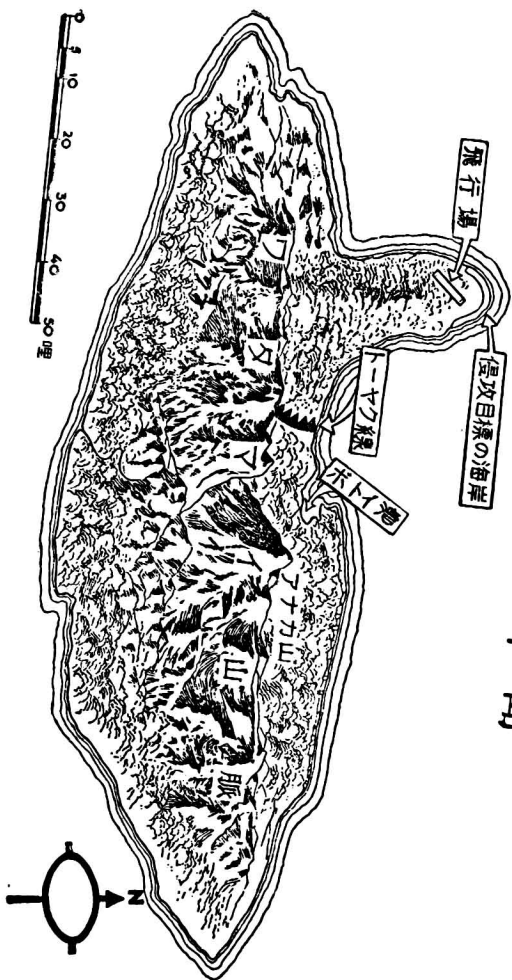
The Naked and the Dead

by

Norman Mailer

***Copyright in U. S. A. by Norman Mailer 1948.
This book is published in Japan by arrangement
with S. Meredith through C.E. Tuttle Co., Tokyo***

アノポパイ島



裸者と死者
(I)

つぎの歌から歌詞を引用することを許可してくださった出版者と版權所有者に、深甚の謝意を表する。

『ベティ』ボール・フォガティ、ルーディ・ヴァリー共作、ニューヨーク市カール・フィッシャー社版權所有（一九三〇年）。その許可をえて使用す。

『兄弟、十錢玉一つ貸さないか？』E・Y・ハーバーク作詞、ジェイ・ゴーン作曲。ハームズ社版權所有（一九三二年）。音楽出版者協会の許可をえて使用す。

『褪せた夏の日の恋』フィル・バックスター作詞ならびに作曲、レオ・フイスト社（一九三一年）。その許可をえて使用す。

『わたしはバレードが大好きだ』テッド・ケーラー作詞、ハロルド・アーレン作曲、ハームズ社版權所有（一九三一年）。音楽出版者協会の許可をえて使用す。

『家へいく道おしえてたもれ』アーヴィング・キング作詞ならびに作曲、ハームズ社版權所有（一九二五年）。音楽出版者協会の許可をえて使用す。

『これをおもうとおまえが恋し』ジャック・ストラチ、ハロルド・マーヴェル、ハリ・リンク共作、バーン社版權所有（一九三五年）。その許可をえて使用す。

ノーマン・メイラー 版權所有（一九四八年）アメリカ合衆国、ニューヨーク市 J・J・リトル・フィヴズ社印刷。一切の權利を保有す。

この小説を執筆中、いろんなときにわたくしを助け、励ましてくださった、ウィリアム・レーニイ、シオド・S・アマッセン、ならびにチャールズ・デヴリンに感謝す。

*

*

*

この小説中の人物や出来事は、すべて仮作的なものであって、生きている、または死去した人物に似たところがあっても、それは偶然の一致にすぎない。

母
上
と
ビ
ー
へ

第一部 波

1

だれも、眠ることができなかった。夜が明けると、上陸舟艇がおろされ、軍の第一陣が磯波いそなみをけて、アノボベイ島の海岸に強襲上陸するだろう。もうあと数時間すれば、彼らのあるものは死んでいるのだ。それは、輸送船中のものにも、護衛艦中のものにも、ちゃんとわかつていた。

ひとりの兵士が、寝棚バンクにびったりと身をよこたえて、目を閉じている。が、頭はさえきっている。あたりには、ときどきとろとろとする兵士たちのささやき声が、まるで磯波のざわめきのように聞こえる。「お

れやいやだ。いやだ、いやだ」だれか、夢のなかで叫び声をあげる。兵士は目をあけて、ゆっくり船倉を見まわす。ハンモックや、裸体や、つりさげた軍装品が、ごちゃごちゃしていて、なにも見わけがつかぬ。船首のほうへいきたいんだとおもう。ちくしょう！

と、ちょっといいながら、もぞくき起きあがり、両足を寝棚バンクからたらす。上のハンモックの鉄棒が、兵士の曲げこんだ背にまよこにふれる。兵士はため息をつき、手をのばして、柱にむすびつけておいたくつをととり、ゆっくりとはく。彼の寝棚バンクは五段のうちの四段目である。兵士は、下のハンモックにいる兵士を踏みつけはしないかと恐れて、薄暗がりのなかを、あぶなそうにおりる。床の上におりると、乱雑にごたごたおいてある袋や背囊いしづのあいだを、ひろってあるき、いちど小銃につまずく。そして、隔壁のドアのほうへいく。おなじように通路がふさがっている、もうひとつの船倉をとりぬけて、やっと船首にでる。

なかは、まるで蒸しぶろのようだ。現にいまもひとりの兵士が、たったひとつしかない真水のシャワーをつかっている。これは、軍隊がこの船にのりこんでか

らというものの、ひっきりなしに使用されているのだ。

兵士は、使用されない海水シャワー台のなかで、クラブ賭博をやっているわきをとって、便所のぬれたまたぎ板の上にうずくまる。たばこをわすれてきたので、三、四尺はなれたところにすわっている兵士から、一本もらう。たばこをふかしながら、吸い殻のちらかっている、黒いぬれた床を見る。そして、便器を洗い流している水の音に、耳をかたむける。いったい、ここへやってくる口実は、じっさいにはなにもなかったのだ。しかし、いつまでも便器の上にうずくまっている。ここのほうが涼しいし、便所や海水やクローリンの臭気も、ぬれた金属の、じっとりとした、物柔らかいにおいも、船倉のなかの、むっとする、汗じみた人いきれの悪臭ほどに、重くくさくはない。

兵士は、長いことこうしていたが、やがてそろそろ立ちあがって、緑色の作業ずぼんをあげ、さて寝棚にもどっていく苦勞を考えてみる。自分はあそこで寝たまま夜明けをまっているのだということが、彼にはちゃんとかかっている。そして、ひとりごとをいう。もう朝だといいいんだが、かまやしない、いっそ朝になっ

てるといいんだが、と。もどっていきながら、こどものころの、ある夜明けのことをしきりにおもいだす。その日は自分の誕生日で、母親が自分のために、パーティをひらいてくれる約束をしてくれたので、寝たまま目をさましていたのだった。

その晩早く、ウィルスンとギャラガーと特務軍曹クロフトは、本部付き歩兵小隊の伝令兵ふたりといっしょになって、六十八ポーカーの勝負をはじめていた。

彼らは、船倉のデッキの、たったひとつあいている場所を占領していた。そこで、電灯が消されても、札を見ることでできた。それでも、目を細めに見なければならなかった。まだついているたったひとつの電灯は、階段のそばにある青電球で、それだと、赤い札も黒い札も、なかなか見わけがつかなかったからである。もう何時間もやっていたので、頭がぼんやりしていた。持ち札がつまらんやつだと、賭けは機械的になって、まるで無意識にやるのだった。

ウィルスンは、しょっぱなから運がよかったが、一勝負のうちに、つづけて三とも賭け金をとってからと

いうもの、彼の運はほんとに驚嘆するほどだった。彼は、すばらしく快い気持ちになっていた。彼の組んだ両足の下には、山ほどのオーストラリア・ポンド紙幣が、だらしなく、むぞうさにつまれていた。自分の金をかぞえると、運が悪くなるとはおもいながらも、もうかれこれ百ポンドはもうけたにちがいないと、胸算用をしていた。そのため、のどもとに、どんよりした欲情的な感じがうずいていた。これは、なんでもどっさりもっているとき、彼がいつもおぼえる感じだった。「なあ、おい」と、彼は、柔らかい南国調子で、クロフトにいった。「こんな金や、おれにゃ厄病神だよ。ちくしょうめ、こんな札がかぞえられるかってんだ。濠州っぺえは、なんでもおれたちとは逆にしやがる」

クロフトは、返事もなかった。すこし負けていたが、それよりも怒れるのは、ひと晩中、ばつとしない札ばかり、ひきあてていたからである。

ギャラガーは、けいべつするようにつぶついつた。「べら棒め！ てめえのように運がよかったら、かぞえることなんかいあるかい。手でかきあげりゃいいんだ」

ウィルスンは、くつくつ笑った。「そのとおりだ。だが、よっぽど強い手でなくっちゃだめだ」彼は気やすく、こどもっぽいほどうれしそうにまた笑って、札をくばりはじめた。彼は、見事なたてがみのような、明るいおよび色の頭髮をした、三十ぐらいの大男だった。いかにも健康そうな、血色のいい顔の、大きな目鼻だちは、すっきりしていた。顔につりあわぬ、まるい銀ぶちのめがねをかけていて、ちょっと見ると、学究的な——とまでいかないとしても、すくなくとも、きちんとしたようすをしていた。札をくばるとき、彼の指は、じれったい札の感触をたのしんでいるみたいだった。ウィルスンは、酒のことを夢想していた——こんなに金があつたって、酒ひとつ買うことができないのだとおもうと、ちょっと気がくさった。「おれやあな」と、彼は気やすく笑いながらいった。「いままであんなに飲んできたくせに、手もとに酒びんがないことにや、酒の味ってどんなものだったか、さっぱりおもいだせないんだよ」くばりのこりの札を手にもちながら、ちょっと考えこんでいたが、またくつくつ笑った。「ちようどおまんこやるようなもんよ。いつで

も、すきなほどぐあいよく、しっぽりやれてもだな、現にいまやっておらんことにゃ、どんな味のもんだっ
たか、さっぱりおもしろいせんようにだ。またじっさい
そいつをやっていることにゃ、おまんこって、どんな
気持ちのものか、とてもおぼえておれんようにだよ。

いつかおれや、町はずれに、女友だちをひとりもって
たことがあったが。友人の細君だ。それがよ、腰のつ
かい方ときたら、とてもすばらしいんだ。いろんな
女とやるにゃやったが、あいつだきゃあ、どうにもわ
すれられんな」彼は賛嘆するように首をふり、手の甲
で広く彫られた額をふき、金色の頭髪をかきあげ、い
かにも愉快そうにくつくつ笑った。「それがだ」と、
彼はやさしい声でいった。「まるでこう、蜂蜜の樽^{はちみつづ}ん
なかに浸すような気持ちだったよ」彼は、札を二枚ず
つ伏せて、みんなにくばり、それからつぎの札を裏が
えした。

いちど、ウィルスンはまずい札をひらいた。すると
彼は、しこたまもうけこんでいたので、ひとまわりだ
けつきあって、それからぬけた。この作戦が終わった
ら、なんとかして酒をつくる方法を考えだしてやる

う、と彼はおもった。チャーリー中隊には、糧秣軍曹^{りようもつ}
がいて、そいつは一クオート五ポンドで売って、二千
ポンドはもうけているにちがひなかった。砂糖とイー
スト菌と、桃か杏^{かんす}のカン詰めが、三つ四つありさえす
りゃ、できるんだ。そうおもうと、あったかい、甘い
幸福感が、胸に感じられた。そんなになくなっちゃって、
できるさ。従兄^{じと}のエドワードのやつは、糖蜜と干しぶ
どうをつかっただけだったが、それでもけっこう飲め
たんだからな。

だが、ウィルスンは、ちょっと気がくじけた。自分
でやるとなると、材料を全部、いつか夜にでも、食堂
テントから盗みださなくちゃならんだろう。そして、
二日ぐらいかくしておく場所を、見つけなくちゃなら
ん。それから、どろどろしたやつをおいておく、どっか
ちょっとしたいいい隅^{すみ}っこを、見つけたす必要がある。
テントに近すぎると、だれかにひょっこり見つけられ
ないともかぎらん。といって、大急ぎでサイフォンで
ちよっとやるのにゃ、あんまり遠すぎてもかなわん。
作戦が終わって、固定テントに住むようになるまで
またないとする、いろんな問題があるわけだ。だ

が、それまでまつのは、なんといつても長すぎる。三月も四月もかかるかもしれない。ウィルスンは、落着きがなくなりかけた。軍隊じゃ、なにかひとつ自分で手にいれようとすると、じつにいろんなことをたくらまなくっちゃならん。

ギャラガーもその札を早くすてて、腹だたしそうにウィルスンを見ていた。こんなぐずのげす野郎でなくちゃ、大きな賭け金を全部せしめることあできやしない。ギャラガーは、気がとがめてしかたがなかった。

すくなくとも三十ポンド、かれこれ百ドルは負けていた。もっとも、その金の大部分は、ここへくる途中でもうけたものだったが、だからといって、気が安まるわけではなかった。彼は、もう七カ月の腹をかかえている、妻のメアリーのことを考えた。そして、どんなようすをしているか、おもいだそうとしてみた。しかし、すまないという気持ちしか感じられなかった。あいつにおくってやらなくちゃならない金だ。それをおれは、いったいなんの権利があつて使いまくつてののか？ 彼は、いつもおぼえる、深い、にがにがしい気持ちになった。自分にとっちゃ、なにもかも、おそか

れ早かれ、いまいましてしまふんだ。彼は口を堅くむすんだ。なにをやってみても、どんなに激しく働いてみても、いつも、にっちもさっちもいかなくなるようにおもわれた。にがにがしい気持ちで激しくなつて、一瞬、彼を圧倒してしまつた。なにかしら欲望され、なにかしら感じられ、それがしよっちゅう彼をじりじりさせているんだが、さてそいつをつかまえようとする、と、すつと消えてしまふ。彼は札を切っている伝令兵の、レヴィを見た。すると、ギャラガーのどがごっくり鳴つた。あの猶太人め、さんざんいい芽をだしてやがる。すると、彼のにがにがしい気持ちは、激怒にかわり、のどを締めつけ、鈍い震え声の呪詛^呪となつた。「もういい、もういいんだ」と、彼はいつた。「札のちくしょうを、もうそこらでくばつたらどうだ。切るなあいにかげんにやめちまつて、勝負をはじめたらどうだ」彼は、ボストン・アイルランドなまりの、間のびのした、聞き苦しい調子でいつた。レヴィは顔をあげて彼を見て、口まねをした。「よし、よし、札ああ切るなああやめちまつて、しょおおおぶをはじめよ」

「なにがそんなにおかしいんだ」と、ギャラガーは半ばひとりごとをいった。彼はひねくれもんの気むずかし屋といった印象をあたえる、隆肉で屈強な体つきの、背のひくい男だった。その体につりあつた顔は、小さくて醜く、ひどいきびのあとが、痘瘡のあとみたいなにいっぱいいついていた。そのため、顔の皮膚は、赤味をおびた紫色の、しみとぶつぶつにおおわれていた。たぶん顔の色のせいかもしれないし、または憤つとしてるみたいに一方に曲がっている、長いアイルランド人の鼻の格好のせいかもしれないが、いつもかんしゃくをおこしているように見えた。でも、まだやっと二十四だ。

ハートの七がでた。伏せてある自分の札をそっと見ると、両方ともハートだったので、彼はちょっと希望を感じた。一晩中、まだいちどもつづき札がでなかったで、こんどこそはでる番だぞ、とおもった。「いくらやつらでも、こんどこそあだまされんぞ」と、彼はおもった。

ウィルスンは、一ポンド賭けた。ギャラガーは彼に賭けました。「よおし、こんどは一つ、でっかい賭

けにしようぜ」と、彼はかみつくようにいった。クロフトとレヴィがつづいて賭けた。ウィルスンが札をすてると、ギャラガーは一杯くわされたなと感じた。「どうしたんだ？ きさま、こわがってるのか？ あすになりや、きさま、その頭の鉢を吹きとばされるだけじゃないか」彼の言葉は、トランプ台がわりの折りたたんだ毛布の上へ、札をばさばさ投げだすことで、尻きれとんぼになったが、しかしなにか罰あたりなことでもいったような、慄然とする冷たい不安を感じた。「聖母マリアさま……」と、彼はいそいで口のなかでくりかえした。首のあるべきところが、血だらけのこぶになって、海岸によこたわっている、自分の姿が、まざまざと目にうかんできた。

つぎの札がくばられて、スピードとでた。自分の死骸は本国におくりかえされるだろうか。メアリーは自分の墓をおとずれるだろうか？ 自分を憐れむ感情は、快かった。彼はちよつとのあいだ、妻の目に憐愍の情がうかぶのを見たいという、あこがれをおぼえた。あいつにやおれの気持ちかわかるんだ、と彼は心のなかでいった。しかし、彼女の顔をおもいだそうと